イェーナ時代におけるヘーゲルの哲学への導入の問題と論理学の理念

船盛　茂

はじめに

ボッフム大学ヘーゲルアルヒーフでのヘーゲル全集（Georg Wilhelm Friedlich Hegel:Gesammelte Werke）編集に関連して、イェーナ時代のこれまで散逸していたり、執筆時期が確認できていなかった諸資料などについてのすぐれた文献学的研究の成果を踏まえて、最近のヘーゲル哲学の研究は、専ら比較的初期の段階、その内でも特にイェーナ時代の彼の哲学研究に集中していると言える。すなわちヘーゲル哲学の本質的な主題と、その展開の正しい理解との関連で、イェーナ時代の諸論文に対する精確な知識を求めるための研究、またそのために紆余曲折しているこの時期の彼の体系構想を明らかにせんとする研究、更には単に後期の完成した彼の哲学体系との関連でこの時期のヘーゲルを理解するのではなく、自己の生きている時代、社会更には歴史への鮮烈な問題意識をもって現実と苦闘しているヘーゲルの内に、後の静的なヘーゲルとは異なる動的な思想、その問題意識とそれへの取り組み姿勢の故に現代に通じる新たなヘーゲル像を求める研究などの、多くのすぐれた成果が発表されつつあるのは、周知のところである。これらの研究はいずれにしても程度の差はあろうが、H・キンメアレが指摘しているように、イェーナ時代わけてもその前半の時期の研究が「ヘーゲル哲学全般――単にその根本的素質のみでなく、その一貫した展開をも含めて――の評価にとり、本質的に新しい観点をもたらすであろう。」[注1]との確信の上に進められていると言ってよいであろう。

我々もこれまでイェーナ時代のヘーゲルの哲学について、いくつかの小論で『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』（以下『差異』と略）や『人倫の体系』更には『精神現象学』を含むこの時期の中での „für uns“ の使用についての分析を通じて[注2]、イェーナ時代のヘーゲルの思想の解明を試みてきた。この小論においては、それらの研究の上に立って、現在多くの人により研究が進められ、次第にその真相が明らかにされつつある「論理学」及び「形而上学」と『精神現象学』の関係について、さしあたり論理学に焦点をあてながら、イェーナ時代の始め頃の彼の論理

学の構想とそれに託された役割といったことについて、解明を試みることにしたい。

一

ヘーゲルは自らの最初の哲学的著作である『差異』の冒頭で、ラインホルトを念頭に置きつつ、彼の哲学に対する言わば歴史主義的取り扱いを厳しく退けている。と言うのもそれはひとつには真理が存在するということを全く知らず、そこでは一切が歴史的に相対化された私念へとなってしまうと思われたからである。またヘーゲルはすでにこの段階においても真理が一つであり、しかもそれが体系的に展開されるべきであるとの確信をもっているが、[注3]そのような彼の立場からすれば、自らの哲学の独自な観点を保持せんがために、他の諸哲学の独自性を認めようとするラインホルトの見解は、まさに真理への要求を排除せんとするものとして、認めるわけにはいかなかった。それに加えてラインホルトが本来の哲学の前に、哲学の前提としての真理への愛・信仰を要請するとき、ヘーゲルにとりラインホルトは哲学の殿堂への歩行を省くために、空白の前庭（Vorhof）を設けていることになる。[注4]

さてヘーゲルは一方ではラインホルトを引き合いに出しながら、ラインホルト的歴史的手法、更には哲学に前提を設けることに反対するわけであるが、同じ『差異』において哲学の必要、哲学の誕生の必然性について述べるとき、一方では彼はそれを強く歴史的なものとの関連で捉えている。哲学の必要の源泉は分裂である。教養は分裂したものを、本来は絶対者の現象であるにもかかわらず、それをその同一性から切り離し、絶対者の外に独立して存在するものとして固定する。それにより人間と絶対者の間に多くの制限されたものより成る一つの全体的建築物が建てられることになる。この建築物が悟性の立場に立つ教養により、絶対的なものとして受け取られ、従って分裂が最高の状態に到ったとき、それを再び止揚し、諸対立の内に同一性を示し、対立せるものを絶対者の現象として統一的に捉えんとする哲学の必要が生じる。[注5]哲学の必要性の自覚の歴史性とともに、哲学の完成もまた深い歴史的意識の内で捉えられている。それは時期的には少し後になるが、同じイェーナ時代一八〇五～一八〇六年冬学期の彼が初めて行った哲学史の講義で「世界の内に一つの新しい時が到来した。世界精神は今一切のフレムトな、対象的存在を処理してしまい、最終的に自己を絶対精神として把握し、対象的であるものを自己から産出する――ところまで到達したように見える。有限な自己意識と――無限な自己意識との闘いは終わった。」[注6]からも窺うことができる。

確かに哲学の登場は一面ではいつ、いかなる所で、いかなる形で現れるかは偶然であるが、しかし分裂の固さが感じられるようになったとき、しかもその分裂が教養によりもたらされることにより、歴史的に規定されている。ヘーゲル自身まさにそのような歴史的必然性のもとに、自己の哲学の課題・生成を自覚していた。[注7]ヘーゲルが退けたのは、それまでの諸々の哲学を相対化してしまう、それにより真理を非常に高次のところへ祭り上げ、結果的に真理換言すれば哲学そのものの前に、哲学その

ものには属さない前提を設けるといったラインホルト的歴史的手法であって、哲学が登場するについての歴史性、更には哲学の内容を構成するものの歴史性については、彼はそれを哲学にとり必然的なこととして理解していると言えよう。哲学の登場と内容を成すものの生成に関してのヘーゲルのこのような強い歴史的意識が、深い歴史性を内に蔵し、それに支えられた『精神現象学』の誕生を生み出すもとになっていると言っても過言ではなかろう。しかしこのことについては、ここではこれ以上の言及は控えることとしたい。

それではイェーナ時代初めヘーゲルは自己の理解する哲学と歴史性との関連をどのように理解していたのであろうか。我々がこれまで既に見たように、[注8]哲学の必要の源泉としての分裂とは生あるいは絶対者の分裂に外ならない。[注9]生とは色々な部分が結合して一つの統一体を成しているものであるが、その統一はしかし直接的なものに止まることはできず、その本性により必然的に分裂しなければならない。生はそこに分裂がなかったら単なる無、夜にすぎない。[注10]自己を必然的に分裂し、それを通じて対立的に自己を形成するのが生である。生の分裂をその源泉から切り離し、固定するものが悟性であり、反省の働きに他ならない。ヘーゲルはその分裂・固定を歴史的に捉え、古いところでは精神と物質、魂と肉体、信仰と悟性との対立として、新しいところでは理性と感性、知性と自然、より一般的には絶対的主観性と絶対的客観性といった対立組により理解している。そしてまさしく悟性がそのようなものであることからこそ、内容を捨象した抽象的統一ではなく、反省の媒介により成立する生ける統一、有機的に組織づけられた真の総体性の再興こそが、哲学の課題として自覚されたのである。それ故確かに哲学がいつ、どこで誕生するかは偶然であるとしても、分裂が哲学の必要の源泉と自覚され、しかもその分裂が歴史的に捉えられていることにより、真なる哲学の誕生は歴史的に必然的であることになる。しかし我々が見る限りにおいては、この時期のヘーゲルは哲学と歴史との係りについて、これ以上の言及は行っていない。それが本格的に行われるようになるのは、イェーナ時代も後半に入って、哲学への入門の学として「意識の経験の学」ということが、彼の意識に上ってきてからであろう。[注11]このことについては後に触れることにしたい。

さていま我々は哲学の歴史性に関連して、ヘーゲルが哲学の必要の源泉を分裂に見、更にそこから有機的に組織づけられた真の総体性の再建こそが哲学の課題として捉えられていることについてみた。それでは分裂から統一への転換はいかなる働きにより、どのように遂行されるのか、それはまた彼が当時考えつつあった全体的な哲学像のどの部門に位置し、どのような役割を担うべきものとして考えられているのであろうか。[注12]

ヘーゲルは『差異』において、哲学の課題を「存在を非有に――生成として、分裂を絶対者に――絶対者の現象として、有限者を無限者に――生命として定立する」[注13]ことに見ている。しかしこのことが哲学の課題たり得、またそれらの遂行が果されるためには、あらかじめそこに①絶対者そのものが存在すること、②意識の総体性からする脱出存在、存在と非存在、概念と存在、有限性と無限性との分裂が前提されていなけれ

ばならない。絶対者の存在――これはハイデッガーも指摘している如く、[注14]ヘーゲル哲学の最も根本にある原理であり、ヘーゲル哲学の言わばアルファーであり、オメガーである。しかし、ヘーゲルはその絶対者を一方では「無」と言ったり、「夜」とも言ったりしている。すなわち絶対者は存在はしていても、人間がそれへと悟性や理性を通じて働きかけない限り、いまだ無規定、無差別であることになる。しかし絶対者は絶対性という自らの本性の故に、単なる直接的な自己同一性にいつまでも止まり続けることはできず、現象することにより、無規定の夜の状態から脱出しなければならない。主観的なものと客観的なものとへの分裂――これは絶対者の所産でもあって、悟性の働きにより偶然的・恣意的に産み出されるのではない。絶対者が直接的同一性から自らを現象させる。その現象せるものを、悟性は絶対者の現象とは解さず、個々分裂せる個別的なものと解し、固定する。そのような悟性による分離・固定を理性を媒介して自らへと関係づけることにより、自らの総体性を回復する。これは絶対者が自らの総体性を回復する過程として、絶対者の自己形成の歴史であることになり、それをヘーゲルは次のように述べている。「絶対者はその発展すなわち絶対者が彼自らが完成するまで産出し続ける発展の系列において、ただ不断に発展し続けるのみでなく、同時にその道程のすべての点に自らをつなげ、自らを一個の形態にまで組成しなければならないのである。そしてかかる発展の道程のすべての点という多様性において、絶対者は自らを形成しつつあるものとして、現れるのである」。[注15]それ故絶対者の意識に対しての構成が哲学の課題であるが、そのために

は「絶対者は反省され、定立され」[注16]なければならないのである。

本来は絶対者の現象であり、全一なる統一の内にあるものを、固定したもの、制限されたもの、明確に規定されたものそれ故個別的なものとしてのみ受け取り、これらの存在者間の関係を固定して立て、諸制限を完全にし、新たな分離でもって満足しているのが悟性である。悟性が自らのこのような立場に固執し、そこに止まり続ける限りは、悟性の立場は絶対者そのものの否定となるが故に、退けられねばならない。それではヘーゲルがここで提示する悟性の否定とは、いかなる意味に考えられるべきであろうか。

悟性の限界を念頭において、ヘーゲルはそれの否定を「悟性が産み出す各々の有は規定されたものであり、規定されたものは未規定者を自らの前と後にもっている。有の多様性は二つの夜の間に不安定に横たわっている。多様性は無にもとずいている。というのは未規定者は悟性にとり無であり、無において終わらざるを得ないから。」[注17]と指摘している。すなわち悟性は自らの働きの結果として、むしろ自己自らの否定へと到らざるを得ないと言えよう。悟性の自己否定に関しては、『差異』の中にこれと同様の表現を他にも認めることができるが、このことからも明らかなように、悟性の否定は悟性に対してあるフレムトなものからなされる否定ではありえない。なぜなら、もしそれならばそこには再び新たな対立が生じるのみであり、依然として分離に固執する悟性の立場が支配し続けることになる。ヘーゲルは悟性の反省的思惟に関して、それを単に孤立的反省や対立を単に捨象し、抽象的統一を求める純粋思惟を反省の

真理としてみる見方に対して、「反省の自己否認」[注18]こそを反省の真理として捉えている。このことを考え合わせてみても、悟性の否定は悟性自らによる自己の否定であり、そしてそのようなものとしてまさしく理性による否定に他ならない。というのも理性とは彼にとって、現象を個別的なものとしてのみ受け取るのではなく、絶対者への関係において捉えつつ、一切が絶対者への関係においてあるような、総体性の再建を目指すものであるからして、反省が自らの思惟の有限性を自覚し、それの否定へと到ったとき、それは既に単なる悟性的思惟ではなく、理性的思惟としての性格を持つことになっているからである。してみれば理性の悟性への関係は、悟性の定立作用そのもの、従って悟性の立場そのものの単なる否定、排除ではなく、むしろヘーゲルの言葉を借りるならば、「理性は悟性による分離の絶対的固定に反対するのであり、そして絶対的対立自身が理性から発現するときは、なお更そうである」。[注19]それ故理性は悟性により定立されたものに対しての新たな定立作用としてではなく、まさしく悟性による分裂の固定そのものに対しての否定であり、そのような理性の働きを彼は、「絶対的否定活動」(absolutes Negieren)[注20]と呼んでいる。

二

イェーナへ移って間なしの、それまでの宗教的なものの研究から哲学へと向い始めた直後に書かれた『差異』においては、後の彼の体系への萌芽、ましてや展開などについては、いまだ明確なものを確認できないのは勿論である。そのようなものが出てくるのには今少しの準備期間が必要であった。イェーナで哲学活動を開始した当初の彼の関心は、一方では確かに人倫や自然法へと向けられているが、より重要であったのは、彼のイェーナ大学で予告された講義テーマや、それに合わせてなされた本の出版予告などから推察して、論理学と形而上学であった。H・キンメアレのイェーナ時代の講義についての詳細な研究によれば、[注21]一八〇一～一八〇二年冬学期から一八〇七年夏学期までの一二セメスターの内、一八〇五～一八〇六年冬学期を除く一一セメスターにおいて、表現の仕方などについては若干の相違はあるが、論理学と形而上学の講義予告がなされている。その一方では一八〇三～一八〇四年冬学期以降の講義予告では、それに新たに自然哲学と精神哲学の実質哲学も加えられ、次第に彼の体系構築の努力が全体へと及ぶようになっている様子が窺えるが、少なくともイェーナ時代当初は論理学と形而上学へと大きな努力が向けられているのは明らかである。[注22]

ヘーゲルがこの論理学と形而上学に彼の構想する体系の如何なる部分を担わせ、またどのような役割を求めていたのかについては、イェーナ時代を通じて必ずしも一貫していたわけではなく、微妙に変化していっていると、多くの人により指摘がなされている。それではイェーナ時代当初彼は論理学と形而上学にどのようなことを求めていたのであろうか、またそれは前に検討した『差異』における哲学の必要、すなわち分裂からの全体性の回復ということと、どのように関連してくるのであろうか。このことをローゼンクランツによって報告されている論理学と形而上学

に関する報告[注23]――この執筆時期については、H・キンメアレの研究などから、一八〇二～一八〇三年頃と予想されている[注24]――を中心に見てみることにしたい。

『差異』において論理学、形而上学の果すべき役割について、ヘーゲルは悟性の自己否定と言った考え方を提示していることからも明らかなように、それが概念による固定化という状態を克服するのに役立つという点と共に、対立せるものの根底には絶対者が存し、絶対者こそが一切のものがそこから生じる根源であり、従って絶対者という概念こそがまさしく哲学の原理であることを開示するという、二つの点を見ている。このような考え方は、原則的にはローゼンクランツによってつたえられている論理学、形而上学にも受け継がれていると言えよう。ヘーゲルはこの報告において、真の哲学の構想を念頭に置きつつ、論理学の取り扱うべき内容などについて、次のように捉えている。

哲学はそれが真理の学である限りは無限な認識、絶対者の認識であるのは当然のことであるが、しかしそれは決して有限者の認識を捨象したところに成立する絶対者の認識であってはならない。哲学は「有限な認識の諸形式」(die Formen des endlichen Erkennens)[注25]を内に含むものでなければならない。とは言ってもそれらの諸形式が互いに独立しているのではなく、どこまでも互いに関係し合うような形式で内に含まれていなければならない。それ故その限りにおいては、哲学にあって有限な認識はその存立が認められていると同時に否定されてもいることになる。有限なるものを重視し、それを積極的に自らの哲学の内に取り入れていこうとするヘーゲルの考えの内に、我々は同僚であったシェリングの影響を脱し、自己の哲学を樹立せんとする彼の態度を認めることができよう。そして論理学こそは、この時期彼にとり一方ではそのような有限者に係わる哲学の一部門として位置づけられているのである。論理学の対象とするもの、それは「有限性の諸形式」(Formen der Endlichkeit)[注26]を残すところなく提示すること、しかもそれらを単に経験的、それ故偶然的に寄せ集めるのでなく、それらは理性から現れ出るわけであるが、しかし悟性はそこから理性を、すなわちそれら有限性の根源である統一性を捨象してしまうため専ら有限性において現れざるを得ない、そのような意味での有限性の諸形式に関係するのが悟性において成立する論理学である。従って論理学における同一性は真なる同一性ではなく単に「形式的な同一性」(eine formelle Identität)[注27]にすぎず、そのような意味で悟性は理性を「模倣する」と言われるのである。

さてヘーゲルは自らの論理学の対象について述べるに際して、それをことさら「真なる論理学」(eine wahre Logik)と呼[注28]んで、他のそれと区別している。その理由の一つは明らかに今上に指摘したことと関連している。すなわち他の多くの論理学が同じく有限性の諸形式を対象とするにしても、それを経験的、偶然的に寄せ集めるにすぎないのに対し、彼がここで言う論理学はそれらを理性から現れ出るように集める点で区別するためであろう。しかしそれに加えて今一つの特に重要な理由は、他の論理学――ここではカントのカテゴリー論などが特に彼の念頭に置かれていると思える――が有限性の諸形式を取り扱いつつ、結局どこまで

も有限性の形式に止まったままであるのに対して、ヘーゲルのそれは有限性の諸形式を対象とすることを通じ、最終的にはそれの否定により思弁的思惟へと到ることを、その本来の課題としているからである。それ故ヘーゲルの求める論理学は、有限性の諸形式を対象とする限りでは、悟性的立場に成立するものと言えるが、それと同時に有限性の諸形式が理性の模倣とされ、更にはそれを通じ有限性の否定へと到ることにより、そこにはすでに理性的側面もいまだ否定的にではあっても存するという二重性において考えられていると言える。ヘーゲルの次の文はそのことを端的に示すものであろう。

「最終的には我々は悟性的諸形式そのものを理性により止揚し、悟性のこれらの有限な諸形式が理性にとりいかなる意味と内容をもつものであるかを示さなければならない。理性の認識はそれ故それが論理学に属する限りは、論理学のまさに否定的認識となるであろう。」[注29]

従って論理学の内にすでに理性的、すなわち思弁的側面が存する限りにおいて、論理学はヘーゲルにとり「哲学への導入」(Einleitung in die Philosophie)[注30]としての役割を担うことになる。

論理学の内容については、以上のような論理学の役割、性格を受けてそれを大きく三つの部分から成るとしている。すなわちまず最初に有限性の一般的諸形式を「絶対者の反省」(Reflex des Absoluten)[注31]として叙述し、次いで有限性の主観的諸形式ないしは有限な思惟・悟性を、段階的歩みの中で概念、判断そして推理を通じて考察し、最後の段階ではこういった有限な認識が理性により止揚されることが示される。ここはそれ故推理の思弁的意味、従って学的認識の基礎が取り扱われることとなる。それ故論理学はその展開を通じて、有限者と無限者の統一の理念へと、従って本来の哲学である形而上学へと自ら進むこととなる。

イェーナでの約七年間のヘーゲルの研究活動については、多くの研究者が体系構想の成熟過程、さらにはそれの完成度といったことを目安にして、いくつかの時期に区分することを試みている。ヘーゲルの手になる直接の文献、更には講義録などが不十分であるなどの理由もあって、その区分についてはいまだ必ずしも一致が見られていないが、それでもイェーナ時代の初めについてはそれを大体一八〇三～一八〇四年頃までと見る点で、およその同意が得られていると言ってよかろう。そしてこの時期の彼の思想の内実、更には体系への構想への理解の手掛かりを得る上で、いま見たローゼンクランツの報告している論理学と形而上学に関する叙述は、とりわけ重要な手掛かりを提供するものであるのは当然である。その内容について上に見たように、ここで論理学は表面的には悟性による有限な認識を取り扱いながら、その背後では理性すなわち絶対者の自己展開ということが進行するといった、二重性において理解されている。また論理学と真なる学としての形而上学の関係については、論理学の対象とする悟性の有限性が最終的には否定され、換言すれば有限なものが絶対者の現象であることが理性により明らかにされるとき、論理学は形而上学へと移行しなければならない。[注32] してみれば論理学は真なる学への導入としての役割を担うと共に、しかも単なる導入にすぎないのではなく、そこにすでに絶対者、絶対者の内容のすべてがたとえい

まだ有限性という形式においてではあっても現象している限りにおいては、それ自身すでに「学」でもあることになる。我々がすでに見た如く、ヘーゲルは『差異』の冒頭において、本来の「学」の前にそれへの単なる導入としての「前庭」を設けんとするラインホルトの立場を厳しく退けていた。それ故ヘーゲルがここで論理学を真なる学への導入というとき、それは決してラインホルトの如く単なる前庭に止まるものではなく、同時にそれ自身すでに学の一部を成すものであることになる。

我々はすでに『差異』においてヘーゲが哲学の必要の源泉を踏まえて、対立に固執する悟性的思惟と、悟性による分裂の固定そのものに対しての否定作用としての理性の働き、更にはそれらを通じて明らかにしようとした哲学的思惟をどのように考えていたかを見たわけであるが、『差異』におけるそのような論点を、ここで構想されている論理学の内容更にはその展開と関連づけて見るとき、それが基本的には論理学に継承され、しかもその上それが当時のヘーゲルが抱懐しつつあった体系構想の内に、相当程度明確に位置づけられるに到っているのを認めることができる。

この時期のヘーゲルは論理学を哲学そのものへの導入部と位置づけているのに対し、形而上学はそれを受けて「すべての哲学の原理」(das Prinzip aller Philosophie)[注33]を構成することを課題とするとし、両部門を連続はしていても、役割・内容の面では明らかに区別している。ところがイェーナ時代も後半になると、そこに微妙な変化が見られるようになる。それは例えばそれまでの講義予告で「論理学と形而上学」(Logik und Metapkysik)となっていたものが、一八〇六年夏学期では形而上学の名前が消えた上に、「思弁哲学すなわち論理学」(spekulative Philosophie oder Logik)となり、[注34]論理学がそれまでの形而上学の課題とされたものを引き受けるべく、思弁的学問と見なされるようになっている点である。このような論理学に対する把握の仕方は、明らかに論理学を「思惟の諸規定をそれ自体において考察」[注35]するものとする、後年の彼の学の構想に深く係わるものであることは言うまでもない。

このような論理学に対する考え方の変化は、一体何に起因するのであろうか。それは論理学に替わって哲学への導入の役割を担うより適切なものとして、「意識の経験の学」の構想が、次第に具体化してきたことによるのは明らかである。それはその年の五月頃から「学の体系の第一部意識の経験の学」の執筆に着手していることからも明らかである。[注36]学への役割を担うものとしては、論理学よりも、認識としては最も低位の感覚的確信から出発した意識が自らにおいてなす経験を通じて絶対者の知に到る「意識の経験の学」の方が適している。また我々が指摘したように、『差異』においてヘーゲルはシェリングと異なり、哲学の登場そのものについての歴史的必然性と、有限な認識の諸形式がすべて提示され、最終的にはその有限性が否定され、そこに絶対的知が出現することについての歴史性、という二重の意味で歴史的意識を強く持っていた。このような彼の歴史意識が生かされるのは、論理学においてよりむしろ「意識の経験の学」においてであろう。というのもここで意識の経験とは、一人々の意識の織りなす経験であると同時に、人類が歴史の過程におい

て織りなしてきた経験そのものでもあるからであろう。

そのような意味では、意識の概念がどのようにして、いつ頃意識されるようになっていったのかを明らかにすることは、ヘーゲルのイェーナ時代後半における体系構想を解明する上で不可欠と言わねばならないが、このことについての考察は、今後の課題としたい。

註

注1　H.Kimmerle:Zur Entwicklung des Hegelschen Denkens in Jena, in Hegel-Studien Beiheft Band 4 S.41ff.

注2　『美作女子大学紀要』二五号「初期イェーナ時代におけるヘーゲルに関する一考察」や『哲学』第三〇集『フィヒテの哲学体系とシェリングの哲学体系の差異』におけるヘーゲルの哲学的思惟など。

注3　一八〇〇年一一月二日のシェリングへのヘーゲルの手紙などに認めることができる。

注4　Hegels Gesammelte Werke Hrsg.v.Buchner u.O.Pöggeler,Band 4 S.11

注5　ibid. S.12ff.

注6　Rosenkranz:Hegels Leben, S. 156

注7　ibid. S. 202からもそれを確認できる。

注8　注2においてすでに指摘した論文。

注9　生、絶対者などの語の厳密な統一的使用は、この段階では必ずしもなされていない。

注10　Hegels Gesammelte Werke Band 4 S.16

注11　「哲学史」の講義なども、ヘーゲルの歴史意識の深まりと関連があると思われる。ヘーゲルのイェーナ時代の講義予告では、一八〇五～一八〇六年冬学期と一八〇七年夏学期の二回「哲学史」の講義題目があがっている。これは時期的には本論で述べたことと一致している。

注12　体系構想については例えばホルストマンなどのようにヘーゲルが自然哲学、知性の哲学、芸術・宗教・哲学からなる無差別性の哲学、序論的意味と同時に統一の再構成を方法論的に基礎づける論理学ないし形而上学という四部からなる体系構想をすでに持っていたとの指摘もある。しかしヘーゲルがこの時期それについて考えつつあったとしても、それはいまだ例えばハルトコップフが„Hegls Jenaer Anfänge“などに詳細に論じているように、シェリングとの深い結びつきのなかにおいてであったことは考慮しておかねばならない。

注13　Hegels Gesammelte Werke Band 4 S.16

注14　M.Heidegger:Holzwege, S. 117ff.

注15　Hegels Gesammelte Werke Band 4 S. 191

注16　ibid. S. 32

注17　ibid. S. 17

注18　ibid. S. 18

注19　ibid. S. 14

注20　ibid. S. 17

注21　H.Kimmerle:Dokumente zu Hegels Jenaer Dozententätigkeit,

in Hegel-Studien Band 4

注22　このことはH・キンメアレにより明らかにされているように、彼がイェーナ大学への私講師としての就任のために提示した一二からなるテーゼの内、一～五までが論理学に関するものであり、六～八が形而上学に関するものであったことからも言える。

注23　Rosenkranz :Hegels Leben S. 190 ff.

注24　この報告がいつヘーゲルにより書かれたものかについては精確には明らかでない。ここではH・キンメアレにより（注21で指摘の論文）一八〇二～一八〇三年あたりとされているので、それに依拠した。

注25　Rosenkranz:Hegels Leben, S. 190

注26　ibid. S. 190

注27　ibid. S. 190

注28　ibid. S. 190 „Der Gegenstand der wahren Logik……"と使用されている。

注29　Rosenkranz:Hegels Leben, S. 191

注30　ibid. S. 191

注31　ibid. S. 191

注32　ibid. S. 191 f.

注33　ibid. S. 172

注34　H.Kimmerle:Dokumente zu Hegels jenaer Dozententätigkeit, in Hegel-Studien Band 4 S.53ff.

注35　Hegel:Enzylopädie,von H.Glockner S.36 ff.

注36　H.Kimmerle:Zur Chronologie von Hegels Jenaer Schriften,in Hegel-Studien Band 4 S. 144